

装衣

“よそほひ”の学び
—裁縫雛形を通して—



ごあいさつ

今年度の企画展「装ゝよそほひ、の学び―裁縫雛形を通して―」では、大正から昭和初期につくられた裁縫雛形^{ひながた}を展示します。

実物の2分の1や3分の1ほどの寸法で、出来上がりは実物の約4分の1、約9分の1の大きさになるお手本です。男物単衣やこども用の水兵服、それに手甲・脚絆、そして蚊帳まで。裁縫教育の歴史を伝えると同時に、当時の風俗も偲ばせます。

これらの雛形を最初に写真で見たとき、なんとなくつくしく、見事なのだろうと、しばらく見られたものでした。京都府立亀岡高等学校から寄託された五十川てい氏作成の雛形はおそらく1921(大正10)年前後、神戸学院大学附属高等学校より寄贈された神戸森資料も戦前のものです。戦火や阪神淡路大震災をくぐり抜け、素晴らしい状態で保存されていたことに、驚きを禁じえません。

当時の生徒は先生の雛形を手にとり確かめながら、同じサイズのミニチュアの着物をつくって、裁縫の実際を知りました。いまは先生からパワーポイントで手順の説明を受け、布地にプリントされた線を参考に、エプロンやショートパンツなどを縫うのだそうです。はるかに現代的かつ合理的ですが、私は先生手縫いの雛形に、何ともいえない温かみを感じます。

最後になりましたが、雛形をお寄せくださった2つの高等学校、関係者の方々に厚くお礼申し上げます。企画の中心となられた本学家政科の井上えり子教授と学生諸君による解説も、ぜひご一読ください。

2013(平成25)年11月

京都教育大学 教育資料館館長
太田 耕人

<表紙デザイン>

座布団・折り紙・風呂敷など、日本では、古くより愛用されてきました。これら3つに共通した正方形という形は、あらゆる用途にかなった姿へ展開する可能性を秘めています。異なる空間に座布団を一枚敷くことで、リビングやダイニングの役割にもなり、二枚並べて身体を横にすると簡単な寝具へと変化します。折り紙は折り方によって、さまざまな立体物を作り上げることができます。風呂敷が物を包むために自在に形を変化させるように、「装ゝよそほひ、」もまた、私たちの身体を包み込むために四角い布から生み出されたものです。こうした裁縫の本質を表現するため、その四角い布つまり正方形に、裁縫雛形4点を対等に配置しています。日常着の「大裁女物単衣長着」を中心にして、晴れ着である「水平服(男児)」、女物に対しての男物の「袴男袴」、大裁に対しての小裁「でんち(女兒)」、このように配置された正方形は、また1つの正方形となって展開されていく構成となっています。

裏面には何も配置しない正方形を並べて、新しいデザインの衣服が生まれていく可能性を表現しました。(古原)

【凡 例】

- ・本冊子は、2013(平成25)年11月9日(土)から同年12月6日(金)まで、京都教育大学教育資料館まなびの森ミュージアムで開催する、2013年度秋季企画展「装ゝよそほひ、の学び―裁縫雛形を通して―」の解説付き図版目録である。
- ・展示は、井上えり子(家政科教授)が担当し、吉江崇(社会科学科准教授)と古原朋子(教育資料館非常勤職員)が協力した。
- ・本冊子に掲載した図版および解説は、展示品のうちの一部である。
- ・解説文の執筆は、井上えり子、吉江崇および石本与恵、圓口智子、田口朋、仲島聖子、仲野由美、福本紘未、細田樹里、村田遼平(以上、教育学研究科院生)がおこなった。担当した解説文の末尾に執筆者の姓を記した。
- ・本企画展の開催にあたり、下記の各機関および各位には多大な協力を得た。ここに記して謝意を示したい。(五十音順・敬称略)
五十川明子 お茶の水女子大学 亀岡市文化資料館 京都府立亀岡高等学校 神戸学院大学附属高等学校 吉永智子

裁縫雛形と戦前の裁縫教育

井上 えり子
(家政科教授)

裁縫雛形は、渡邊辰五郎（敬称略、以下同様、1844～1907年、渡辺学園創始者、東京家政大学校祖）が1874（明治7）年頃に考案した「雛形尺（ひながたざし）」を用いて作られたミニチュアの裁縫標本である。渡邊は千葉県出身で優れた仕立職人であったが、その技術を見込まれて小学校の裁縫教員として指導にあたるようになった。師匠や家族から学ぶ伝統的な個別指導法から、一斉教授による効果的な近代的教授法を生み出した。その典型が裁縫雛形である。

雛形尺は、半紙を縦二枚に切ってつなげ、その幅を反物幅と仮定して一つ身（乳児用）、三枚で三つ身（4歳前後の子ども用）、四枚で四つ身（10歳前後までの子ども用）、六枚で本裁大人物一枚を裁つ縮尺である。これを使うと実物の約3分の1の寸法で、大きさは9分の1程度の裁縫雛形となる。

裁縫雛形によって、材料の節約、時間の短縮などが計られ、多様な衣服の練習が可能となり、技術の向上につながった。このことから、裁縫雛形による教授法は全国の学校教育に採用され、裁縫教育の近代化に大きく貢献した。裁縫雛形の題材は実に多様であり、日常着であった和服の長着や袴、洋服のシャツやズボン^{かみしも}はもとより、子ども服や作業着に加え袴等の有職類や蚊帳まで含まれた。しかし、1924（大正13）年に度量衡がメートル法に統一されると、雛形尺は学校で使用できなくなり、新たに2分の1の縮尺で雛形を作成するようになったが、各地の裁縫所の多くはその後も雛形尺を用いたようである。

ところで、渡邊は、1881（明治14）年に東京女子師範学校（後の東京女子高等師範学校、現・お茶の水女子大学）の教員となり、自宅に裁縫塾（和洋裁縫伝習所）も開く。1886（明治19）年に、裁縫塾の2階で女子職業学校（後の共立女子職業学校、現・共立女子大学）が設立され、渡邊は女子職業学校の運営にもかかわるようになる。1896（明治29）年には、裁縫塾の経営に専心するようになり、同塾を東京裁縫女学校と改称、裁縫科教員の養成を行うようになった。さらに、1922（大正11）年3月には同校高等師範科が専門学校令による専門部となり、同年12月に専門部は東京女子専門学校と改称、優れた技術を習得した中等学校の裁縫教員を多数養成していった。なお、同校は戦後、東京家政大学となる。

いっぽう、渡邊とともに明治期の裁縫教育発展に尽力した人物として、朴沢三代治（はくさわみよじ、1822～1895年、朴沢学園創始者）があげられる。朴沢は、仙台藩士の子として生まれ、明治維新後、優れた裁縫技術を生かして仕立職人となり、その後、裁縫教育に専心するようになった。朴沢の裁縫教授の特徴は、運針法と部分縫いの重視である。とくに、和裁の要所である袖、襟、裄（つま、着物のすその両端の部分）などの部分縫いの反復練習の重視であった。

裁縫雛形、運針法、部分縫いは、戦前の裁縫教授法の特徴であり、戦前裁縫を学んだ女子学生

のほとんどが体験したといっよい。このうち、精巧に作られた裁縫雛形は、民俗資料館などに寄贈され、戦前の女子教育や生活文化を伝える資料として、各地で保存展示されている。とくに、東京家政大学や名古屋の^{すぎやま}椋山女学園大学（校祖椋山正式・今子夫妻は渡邊の教えを受けた）では、卒業生が作成した貴重な裁縫雛形がまとめてコレクションされており、一般に公開されている。

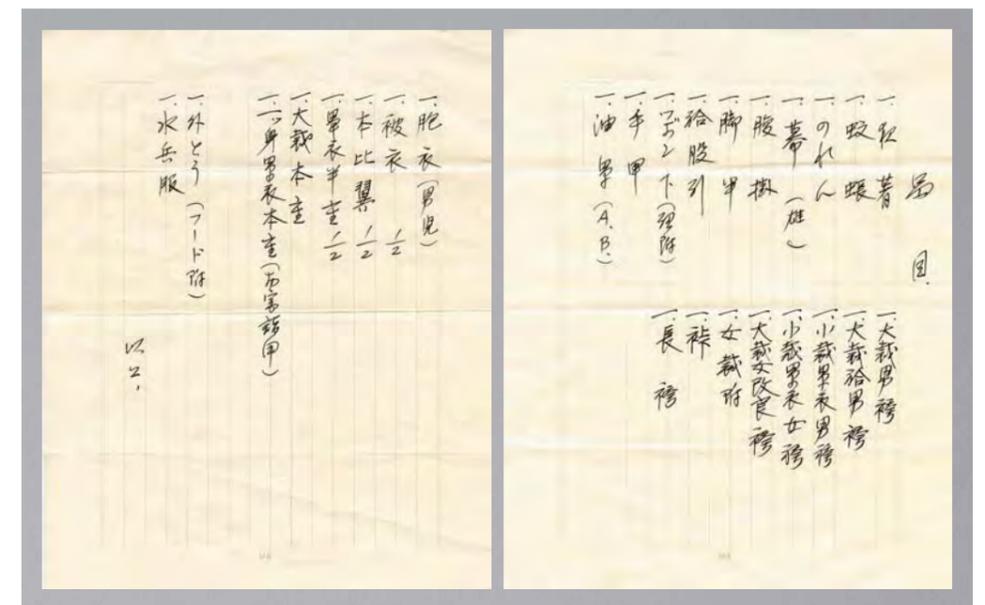


五十川てい裁縫資料（部分拡大）

本企画展で取り上げる裁縫雛形のうち、五十川てい（1902～1981年、旧姓沼田）が作成した裁縫雛形35点（以下、五十川資料）は、彼女が東京裁縫女学校高等師範科在学中に授業の課題として作成したものである。他は、神戸市森高等女学校（現・神戸学院大学附属高等学校）で作成された裁縫雛形10点（以下、神戸森資料）である。神戸森資料には部分縫い標本10点も含まれ計20点である。

五十川は、1923（大正12）年に東京女子専門学校を卒業し、椋山高等女学校（現・椋山女学園高校）教諭などを経て、1941（昭和16）年に京都府立亀岡高等女学校に裁縫教員として着任した。前述のように、五十川が在学中に、東京裁縫女学校高等師範科は同専門部そして東京女子専門学校へと名称変更しているが、裁縫雛形に印された検印をみると「女高師」とあり、裁縫雛形は高等師範科在学中（1920年4月～1922年3月）に作成されたものとみられる。

作品はいずれも精巧に作られた見事な出来映えである。東京裁縫女学校高等師範科（3年制）の教授細目をみると、その内容は、部分縫い、雛形作成、実物作成、製図に分けられ、総時間数1066時間のうち雛形作成に実に247時間以上があてられている。その多くが和装であり、五十



五十川てい裁縫資料目録（現存しないものもある）

川資料も 35 点中 33 点が和装である。このことからわかるように、五十川が学んだ大正期までの裁縫教育は和裁中心であった。

女子中等教員養成の中心であった東京女子高等師範学校（以下、東京女高師）の大正期の裁縫科カリキュラムをみると、和裁に多くの時間をあてている。ここでは、長着（身丈が裾までの和服）の単（ひとえ）・袷（あわせ）物、綿入の大人物、子ども物、男女綿入長着の重（かさね）や単衣の重、比翼仕立て（二枚の長着を重ねたように見える仕立て）、羽織（単・袷・綿入）、帯、袴、襦袢、コート類、夜具蒲団類、前掛、寝冷え知らず、涎掛（よだれかけ）、足袋、股引（ももひき）、手甲（てっこう）、脚絆（きゃはん）、蚊帳まで数多く実習する。しかも、生地の種類によって仕立て方に差があるので、それらすべてを網羅するのである。他方、洋裁は子ども服と男子の下着程度であった。

ところで、昭和期に入り東京女高師の裁縫科のカリキュラムは大幅に改革される。改革の担い手は成田順（1887～1976 年、旧姓南部）であった。成田は本学（当時の京都府女子師範学校）卒業後、東京女高師に進学し欧州留学を経て、1928（昭和 3）年に同校教授に着任した。彼女は、和裁中心であったカリキュラムを見直し、洋裁の時間数を確保するとともに、生徒に自由に婦人服をデザインさせるなど革新的で実用的な洋裁教育を行った。また、成田は裁縫教科書をはじめ多くの著作を出版して洋裁の普及に努めた。そして、昭和戦前期には初等中等教育においても洋裁教育が広まっていく。

神戸森資料は、作成年は不明であるが、婦人洋装が複数含まれることから、昭和戦前期に作成

されたものと推測される。神戸森資料は、裁縫雛形だけでなく、部分縫いも含めて模造紙にまとめて貼られている。このことは教師が教材として作成したことを示している。これら資料は、授業で使用されなくなっても、先輩教師の仕事に敬意を払って大切に保管されてきた。裁縫教材が大切にされたのは、裁縫教員であった同校創立者森わさ（1867～1953 年、神戸森学園創始者、神戸学院大学校祖）の教えが浸透していたからであろう。

ところが、1995（平成 7）年に起こった阪神淡路大震災で同校は被災し、多くの備品や教材が失われた。本資料は奇跡的に無傷で残ったものの、不用教材として廃棄される運命にあった。当時、同校に勤めていた筆者は、全壊した校舎の中から資料を救出し手元で保存した。長年大切に保存されてきた資料が廃棄処分されるのは忍びなかったからである。



阪神淡路大震災被災当時の状況

そしてこの度、本資料は神戸学院大学附属高等学校より正式に本学に寄贈され、昭和戦前期の裁縫教育の一端を示す貴重な教育資料として活用されることとなった。

いっぽう、五十川資料は京都府立亀岡高等学校に長く保管されていた。しかし、大正期の裁縫教育の実態を知る上で貴重な資料であるにもかかわらず、活用の機会が限られていた。そこでより活用の機会を開くべく、本学家政科卒業生の吉永智子教諭の尽力により、昨年、本学に寄託されることとなった。

本企画展において展示されるこれら二つの資料を通して、戦前期の裁縫教育に関心を持っていただければ幸いです。

なお、資料の解説は、2013 年度前期大学院家庭科教育ゼミの受講生である仲島聖子、石本与恵、仲野由美、村田遼平、田口朋、福本紘末、細田樹里が担当した。

参考文献

- 高野俊『明治初期女児小学の研究—近代日本における女子教育の源流—』大月書店、2002 年
- 東京家政大学博物館編『重要有形民俗文化財渡辺学園裁縫雛形コレクション・上巻』東京家政大学博物館発行、2001 年
- 東京家政大学博物館編『重要有形民俗文化財渡辺学園裁縫雛形コレクション・下巻』東京家政大学博物館発行、2001 年
- 共立女子学園百年史編集委員会『共立女子学園百年史』学校法人共立女子学園、1996 年
- 国立歴史民俗博物館編『布のちから・布のわざ』国立歴史民俗博物館振興会発行、1998 年
- 蓮池義治『森わさ先生傳』私家版、1991 年
- 渡辺学園創立百周年記念事業実行委員会年史編集委員会『渡辺学園百年史』学校法人渡辺学園発行、1981 年
- 成田順『被服教育六十年の回顧』私家版、1974 年
- 渡辺学園八十年史編集委員会『渡辺学園八十年史』学校法人渡辺学園発行、1961 年

日常着 上着

大裁（おおだち）男物単衣長着・大裁男物袷長着・大裁男物綿入長着

いずれも男性用日常着の雛形である。身丈 46 cm、衿 20 cm、袖丈 14 cmのサイズで全て綿布により作られている。男物長着の現在の標準寸法は、身丈 144 cm、衿 68.2 cm、袖丈 51 cmであるから、3分の1の縮尺で仕立てられている。

着物の仕立て方は、反物から採寸して、袖、身頃、衿（おくみ）、衿、共襟を裁断する。最初に袖をつくり、次に背を縫い、衿下をくけ、衿をつけて、衿を付ける。脇を縫い、裾をくけ、袖を付け完成する。

ウールの着物や夏物の着物、浴衣などは裏地をつけない単衣仕立てであり、暑い夏は麻の生地や絹(ろ)、紗織(しゃおり)など薄物を使用する。それ以外は裏地をつけた袷仕立てになっている。寒い冬には間に綿を入れて暖をとった。着物の製作は、尋常小学校第5学年および高等女学校第2学年で学習する内容であり、日常着としての着物の仕立て方を修得することは重要であった。(仲島)



大裁男物単衣長着



大裁男物袷長着



大裁男物綿入長着
(いずれも五十川てい裁縫資料)

日常着 袴

小裁（こだち）女袴・小裁男袴・渡辺式改良袴

これらは小裁女袴、小裁男袴、渡辺式改良袴である。寸法は、小裁女袴と小裁男袴が縦 20 cm × 横 13 cm、渡辺式改良袴が縦 31 cm × 横 13 cmである。素材は木綿の布が使用されている。小裁女袴は高等女学校第3学年で、小裁男袴は高等女学校第4学年で学習される教材である。渡辺式改良袴は、体操や遠足のときに着用したもので、渡邊辰五郎の後継者である渡邊滋が考案した。一見普通の袴だが、内股のボタンを留めると足が左右に分かれ、さらに裾の紐を締めることで丈の長いブルマーのようになり、着物の裾の乱れを気にせず歩けるよう工夫されている。(細田)



小裁女袴

小裁男袴

渡辺式改良袴
(いずれも五十川てい裁縫資料)

五十川ていと裁縫雛形

今回の企画展は、2012（平成 24）年 8 月に、京都府立亀岡高等学校より和装を中心とする被服のミニチュア 35 点が寄託されたことをうけて開催されるものである。実物の約 3分の1 などのスケールで精巧に作られたこの愛らしい裁縫雛形は、亀岡高校とその前身、亀岡高等女学校で裁縫を教えた五十川てい（旧姓沼田）の手になる資料である。その一部には、「高師一 沼田貞」や「高師二 沼田テイ」などの筆書きが残っている。

1902（明治 36）年に京都府篠村浄法寺（現・京都府亀岡市）で生まれたていは、亀岡高等女学校を卒業後、上京して渡邊辰五郎の東京裁縫女学校（現・東京家政大学）に入学した。亀岡高校に伝わった裁縫雛形の多くは、東京裁縫女学校の高等師範科に籍を置いていた時分にていが製作したものであり、学校名や指導教授と思われる名前の入った検印が押されたものも存在する。高等師範科が名称変更した東京女子専門学校をていが卒業したのは 1923（大正 12）年 3 月、21 歳の時のことで、4 月には岐阜県大垣市裁縫女学校で職を得て大垣に移り住み、翌年には名古屋市皇華女学校へ転動した。1927（昭和 2）年からは名古屋市椋山高等女学校（現・椋山女学院）で教鞭をとったが、翌年 5 月に五十川重武と結婚、間もなく長女芙蓉（ふよう）が生まれたことで、1929（昭和 4）年 9 月に離職した。



教師生活を離れ家庭に入ったていは、長男尚（たかし）、次男裕（ひろし）を儲けたが、裕が誕生した直後の 1934（昭和 9）年 5 月に重武は亡くなってしまふ。幼い裕をともなって実家の篠村

にもどったていは、青年学校令公布にともない設立された南桑田郡篠村実業青年学校において、1935（昭和 10）年より再び教員生活を開始する。てい 33 歳、5 年半を経ての復帰であった。子育てと教育とを両立したていは、1938（昭和 13）年からは京都精華高等女学校（現・京都精華女子高等学校）、1941（昭和 16）年からは京都府立亀岡高等女学校で勤務し、戦後、亀岡高等女学校が園部中学校・亀岡農学校と統合して京都府立亀岡高等学校となった後も、引き続いて家庭科の授業を担当した。定年退職後、同校で 1 年間の講師を勤めたていは、1962（昭和 37）年 3 月、39 年間の教師生活に幕を閉じることとなる。



京都府立亀岡高等学校の授業風景
(1950 年ごろ)

前述のごとく亀岡高校の裁縫雛形は、その多くがていが 10 代後半から 20 代初めに製作したものである。ていは、いくつもの学校で教鞭をとったが、この雛形もていと行動をともにし、折に触れて裁縫を学ぶ生徒たちに示されたことであろう。若かりし時に作った作品を、定年まで自分の側に置き続けたていの姿からは、自らの生き方に対する信念や自負といったものを感じ取ることができる。退職後のていは、1981（昭和 56）年 4 月に 79 歳で亡くなるまで、木目込み人形の製作を熱心におこない、ていが暮らした家には、現在もその材料がそのまま残されていると聞く。裁縫雛形や木目込み人形の材料は、自分の手で何かを生み出していくことに愛情を注いだていの生涯を、思い起こさせる資料である。(吉江)

子ども服

被衣 (かづき)・一ツ身・水兵服

高等女学校第1学年において、0～2歳の乳幼児用の襦袢（じゅばん）（下着）である一ツ身を習う。

被布（ひふ）（小）は実寸法の約2分の1、大きさにして約4分の1の大きさであり、一ツ身と被布（大）の大きさは実寸大である。被布とは、着物の上に羽織る衣服のひとつで羽織に似ているが、襟あきは四角く、丸い襟がついている。裾が深く左右にうち合わさるような仕立てになっており、前を深く重ね、ふさ付の組紐でとめて着る。江戸時代末期より、茶人や俳人などが着用し、後に婦人や子どもの外出着として用いられるようになる。現在では七五三の3歳のお祝いで女兒が着物の上に着用している。関西地方では「でんち」と呼ばれている。

水兵服は実寸法の約2分の1、大きさにして約4分の1の大きさである。水兵服では、上着を紐で結んで着用、ズボンは横にスリットが入り袴のようなつくりになっており、これも紐で結んで着用する構成になっており、着物から洋服へと移行する過程がうかがえる。また、股の部分が開いているつくりになっており、子どもが自分でズボンを脱げないため、そこから用を足す構成となっている点も興味深い。（石本）



被衣 (小)



被衣 (大)



一ツ身



水兵服
(いずれも五十川てい裁縫資料)

労働着

手甲 (てっこう)・脚絆 (きゃはん)・股引 (ももひき)・腹掛 (はらかけ)

腹掛は尋常小学校で、手甲・脚絆・股引は高等小学校3年生で学習する内容である。手甲は汚れ、外傷、寒さ、日射などから腕を守るため、上腕から手首や手の甲までを覆うようにして装着するもので、手首に固定する際は、こはぜを縫い付けて留める。手の甲には、先端に縫い付けられた輪に中指を通して固定する。脚絆は、脛を保護するために巻く布で、手甲と同じくこはぜで留める。股引は腰から踝（くるぶし）まで密着して覆うズボン型で、股下は縫いつけず左右が重なり合うように作られている。腰の部分は紐で締める。腹掛も作業服として、農作業や山仕事などに広く用いられた。実物大のものも製作されているが、雛型は実際の寸法の約3分の1の縮尺で、全て手縫いである。素材は木綿。手甲・脚絆のこはぜも紙で精巧に作られ、縫いつけられている。（仲野）



腹掛



手甲



脚絆



股引

(いずれも五十川てい裁縫資料)

蚊帳

蚊帳

蚊帳には、普通の蚊帳、母衣蚊帳（ほろがや）、杖蚊帳等の種類があり、普通の蚊帳にも四六間、五六間、七八間、七十間など様々な大きさがあった。蚊帳を仕立てる際には通常、麻が使用されたが、上等なものには透綾（すきや）と呼ばれる絹織物を使用した。また、通常、紅麻が縁の布として使用されたが、上等なものになると縮緬（ちりめん）や緞子（どんす）と呼ばれる紋織物（もんおりもの）等が縁や裾口に使用された。

蚊帳は高等女学校第4学年において作成され、その作り方としては、まず2枚の布を縫い合わせて天井の布を作成した後、その四隅にひうち布を縫いつけ、天井の布の長辺に3枚、短辺に2枚の短冊状の布を吊すかたちで縫いつける。縫い方としてはグシ縫いではなく、布を水平において刺し縫いする方法が用いられた。（福本）



蚊帳

(五十川てい裁縫資料)

神戸市森高等女学校裁縫資料

子ども用下着と雑巾さしかた

1911（明治 44）年に制定された高等女学校教授要目には、高等女学校第 4 学年で「ずぼん下」「涎掛（よだれかけ）ノ類」が記載されていた。また、三友晶子の研究^(注)によれば、1918（大正 7）年頃に高等女学校第 3 学年で「大人下着」「大人ドロワース」の縫い方も学習していたようである。なお、1920 年に東京女子高等師範学校附属高等女学校で全生徒に「下ばき」着用が決定されるなど、大正期には、衛生の観点などから「下ばき（下着）」を推奨する動きがあった。

昭和戦前期に作成された本雛形の子ども用の「よだれ掛け」や「雑巾さしかた」には赤い糸での刺繍が施されており、機能だけでなく、装飾的な部分に関して学んでいたことがうかがえる。よだれ掛けは実物の約 2 分の 1 縮尺で作られており、それ以外のものは約 4 分の 1 の縮尺である。（村田）

(注) 三友晶子「裁縫雛形を用いた裁縫教育の実態について—大正 7 年卒業生の製作品比較を通して—」
東京家政大学博物館紀要第 17 集 p.89～101、2012 年



着物柄の世界

2007（平成 19）年の 12 月 8 日（太平洋戦争開戦記念日）に、北海道東海大学の乾淑子教授による「着物柄にみる戦争～日清・日露、そして太平洋戦争まで～」という講演が大阪市内で開かれた。私は高校生の姪といっしょに聴講し、そこで、はじめて戦争柄の着物の実物を見て、その歴史的背景とともに、図柄の強烈な存在感に圧倒されたのである。

その後、京都の東寺で毎月 21 日に開かれる弘法市や各地の古本市に足を運ぶ機会があれば、戦争柄と着物に関する資料はないかと気にはしていた。その中で、偶然、京都市勧業館を会場とする春の古書大即売会で、戦争柄の友禅図案と出会ったのである。京都の廃業した染物問屋から放出された品で、戦前のものであるという。戦争柄以外にも多くの図案があり、立身出世の意匠である「鯉の滝登りと蜻蛉」柄と昭和モダニズムの意匠である「猫とカクテルグラス」柄の 3 点を購入した。

いずれも、子ども用着物の図案である。子ども用といっても全く侮れない。それらは鮮やかな色彩、緻密な描写、大胆な構図で見るとを惹きつける魅力にあふれたデザインである。

戦前の女性たちは、裁縫の技法を身につけるだけでなく、柄や布に関する幅広い知識や審美眼も要求された。このように優れたデザインが生まれたのは、女性たちの着物に関する知識や審美眼の高さが背景にあったからだろう。つくづく着物柄の世界は奥が深いものである。（井上）



部分縫い標本

①衿、②ポケット、③袖、④ファスナーやボタンの部分縫いの標本である。《①衿の各種》衿は様々な形のものがみられる。洋服の衿からヒントを得て、着物の衿も工夫が施されるようになっていった。

《②洋裁部分縫》の上段左にあるポケットは、服全体の生地と異なる柄で作られており、デザイン性の高さを感じることができる。これとおなじ《②洋裁部分縫》の下段右にあるポケットは、実際の袋はないデザインポケットであり、実用性とともデザインを重視した服も作られていたことがうかがえる。いっぽう、《③袖の種類》にみえる各種の袖は、柄の出し方にまで気を配っており、これらには教師の指導力の高さがにじみ出ているのではないかと推察される。

《④洋裁部分縫》のファスナーには、星形の刺繍の手順が示されている。ファスナーやボタンの開閉のため、力のかかる所は丈夫に縫うなど、衣服を仕立てる上で必須の事柄を指導する一方で、刺繍をして飾ることも推奨しており、より楽しめる裁縫教育を行っていたことがわかる。（田口）



①衿の各種



②洋裁部分縫 (ポケット)



③袖の種類



④洋裁部分縫 (ファスナー)

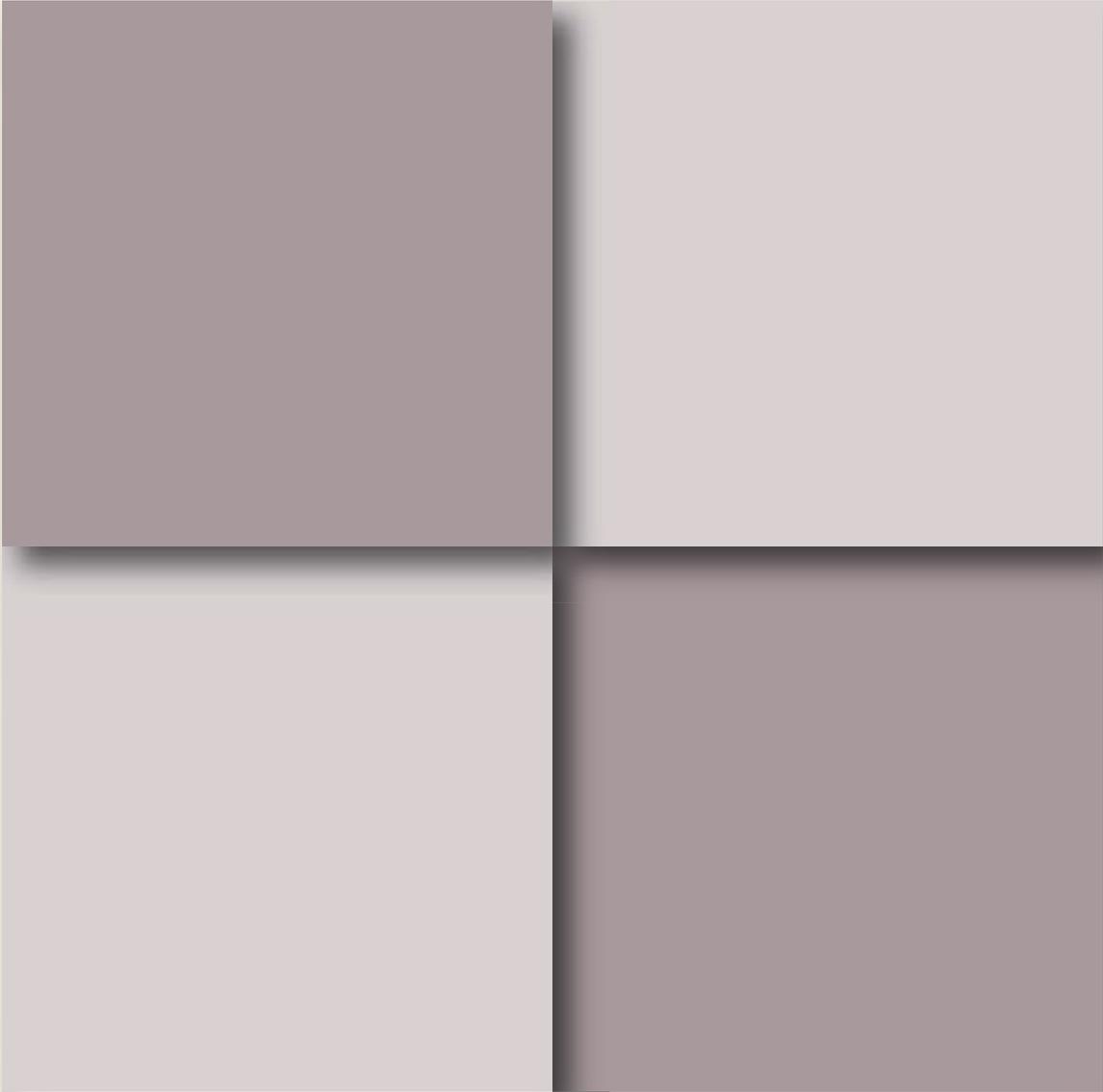
展示品目録

教科書・書籍

| | | | |
|------------------------------|--|-----|-------------|
| 文部省著作 家庭科教科書 第 2 巻 | 尋常小学裁縫教授書 | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 文部省著作 家庭科教科書 第 3 巻 | 高等小学裁縫教授書：第一～第三学年用 | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 文部省著作 家庭科教科書 第 4 巻 | 尋常小学裁縫教授書：第三学年用 | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 文部省著作 家庭科教科書 第 5 巻 | 高等小学裁縫新教授書：第一・第二学年用 | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 文部省著作 家庭科教科書 第 6 巻 | 高等小学裁縫新教授書：第三学年用 | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 文部省著作 家庭科教科書 第 10 巻 | 初等科裁縫(上)(中)(下)初等科裁縫(上)(中)(下)教師用 | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 文部省著作 家庭科教科書 第 11 巻 | 高等科裁縫(上)高等科家事(上) | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 文部省著作 家庭科教科書 第 12 巻 | 初等科裁縫(暫定)：第四～第六学年用 高等科裁縫(暫定)：第一・第二学年用 | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 高等小学 裁縫新教授書 / 文部省 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 高等科裁縫 上 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 図説 着物柄にみる戦争 / 乾 淑子著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 「文検家事科」の研究 / 井上えり子著 | | 1 冊 | 井上 えり子 |
| 再訂裁縫教授法 / 今村順子著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 最新裁縫教科書 上巻 / 木下竹次著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 実験裁縫教授法 / 裁縫教授研究会 | | 3 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 裁縫 1・2・3 / 成田順 安東テイ 藤田とら共著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 裁縫科教授法 / 成田順著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 裁縫教授の実際指導 / 成田順著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 女学生の和服裁縫 / 成田順著, 松井よし共著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 被服教育六十年の回顧 / 成田順著 | | 1 冊 | 井上えり子 |
| 続 被服教育六十年の回顧 / 成田順著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 婦人服学習書 / 成田順著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 婦人服裁縫の基礎並に其の指導法 / 成田順著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 婦人子供洋服裁縫大講習録 / 羽仁吉一著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 創造主義の裁縫教授 / 本間良助著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 尋常小学新裁縫指導書 / 山本キク, 菅谷ふじ共著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 三訂新撰裁縫教授法 / 山本キク著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 増訂新撰裁縫教授法 / 山本キク著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 裁縫教授改善資料 / 渡邊滋著 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 裁縫教科書巻之一 / 渡邊 辰五郎編纂 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 實科高等女学校裁縫教科書 巻の一～四 / 渡邊滋編 | | 4 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 渡邊先生遺稿 渡邊裁縫講義 高等部 / 渡邊滋編 | | 1 冊 | 京都教育大学附属図書館 |
| 裁縫雛形 (旧神戸市森高等女学校裁縫資料) | | | |
| スモッキング | | 1 点 | 京都教育大学附属図書館 |
| 下着 | | 1 点 | 京都教育大学附属図書館 |
| 洋裁部分縫 (ポケット) | | 1 点 | 京都教育大学附属図書館 |
| 洋裁部分縫 (ファスナー) | | 1 点 | 京都教育大学附属図書館 |
| 衿の各種 | | 1 点 | 京都教育大学附属図書館 |
| 袖の種類 | | 1 点 | 京都教育大学附属図書館 |
| 婦人用スーツ | | 1 点 | 京都教育大学附属図書館 |
| コートの際 | | 1 点 | 京都教育大学附属図書館 |
| 襟部分縫・半てん | | 1 点 | 京都教育大学附属図書館 |
| 大裁女物単衣 | | 1 点 | 京都教育大学附属図書館 |
| 単衣重ね | | 1 点 | 京都教育大学附属図書館 |
| 重ね | | 1 点 | 京都教育大学附属図書館 |

展示品目録

| | | |
|-------------------------------------|-----|-------------|
| 女物衿せ | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 男物衿せ | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 男物衿羽織一つ身単衣・男衿羽織 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 一つ身単衣・男衿羽織 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 比翼 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 帽子・前掛 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 一つ身衿・半襦袢・丸帯・腹合せ帯・おでんち | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 袴・被布 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 裁縫雛形 (五十川てい氏裁縫資料・旧亀岡高等女学校教材) | | |
| 《労働着》 | | |
| 手甲 | 3 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 腹掛 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 脚絆 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| ズボン下 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 衿股引 | 2 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 《日常着》 | | |
| 大裁女物単衣長着 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 大裁男物単衣長着 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 大裁男物衿長着 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 大裁男物縮入長着 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 油単 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| コート (縮入り) | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 《礼服》 | | |
| 大裁女物羽織 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 大裁衿男袴 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 男袴 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 長袴 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 大裁女改良袴 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 女袴 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 袴 | 2 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 小裁単衣男袴 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 小裁単衣女袴 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 《子ども用》 | | |
| 被布 | 2 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 帯 | 2 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 一つ身 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| コート | 2 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 水平服 | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 外とう (フード付) | 1 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 《その他》 | | |
| 蚊帳 | 2 点 | 京都教育大学教育資料館 |
| 友禪着物資料 | | |
| 着物下絵 (戦争柄) | 1 枚 | 井上えり子 |
| 着物下絵 (鯉の滝登りと蜻蛉) | 1 枚 | 井上えり子 |
| 着物下絵 (猫とカクテルグラス) | 1 枚 | 井上えり子 |
| 友禪反物 | 1 反 | 井上えり子 |
| 友禪型袴 | 1 枚 | 井上えり子 |



発行日：平成25年11月09日

発行：京都教育大学 教育資料館 まなびの森ミュージアム

連絡先：〒612-8522

京都市伏見区深草藤森町1番地

Tel:075-644-8840/8175

印刷所：株式会社 コームラ